

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00976

研究課題名（和文）日本近世における諸宗教・諸宗派間関係の秩序構造とその変容

研究課題名（英文）The Order and Structure of Interreligious and Interdenominational Relations in Early Modern Japan and Its Transformation

研究代表者

小林 准士（Kobayashi, Junji）

島根大学・学術研究院人文社会科学系・教授

研究者番号：80294354

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀末から19世紀初めにかけて起こった浄土真宗教団内の教義をめぐる論争や異安心（異端信仰）事件を取り扱い、僧侶の修学機関による教学の統制が行われる中、事件が頻発したことや、多様な信者に対する教化の仕方をめぐって僧侶が争っていたことを明らかにした。また、18世紀後半の日蓮宗教団内において他宗派や神道を批判する折伏を重視する動向が存在し、教学上の論争だけでなく地域における紛争も招いていたことなどを明らかにした。こうした紛争の背景には不受不施派の動向もあったが、紛争の頻発化を受けて教団中枢部では折伏は抑制される方向にあったことも指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本近世において仏教が果たした役割としては葬祭や祈祷、寺請けといった事柄が従来注目されがちであった。しかし実際には近世は民衆教化が盛んとなり重要となった時代であった。そのため本研究では教学の展開や教化のありように注目して、仏教が近世社会において果たした役割を再評価した。また、諸宗派や諸教が併存した日本近世の在りように注目したことで、世界の中の他地域と比較した場合の日本宗教の特質を理解する前提をかたちづくることのできた。この点は、異なる宗教を奉じたり価値観を抱いたりする人々がどのような場合に共存できるのかという、現代的問題を考える上でも参考となるはずである。

研究成果の概要（英文）：This project deals with disputes over doctrine and incidents involving heretical beliefs within the Jodo Shinshu sect that occurred from the end of the 18th century to the beginning of the 19th century, and clarifies that while education was controlled by monk training institutions, incidents occurred frequently, and that monks fought over how to indoctrinate diverse believers. It also clarifies that within the Nichiren sect in the late 18th century, there was a trend to emphasize activities that criticized other sects and Shinto, which led not only to doctrinal disputes but also to local conflicts. The background to these conflicts was the movement of the Fujufuse sect, but it also points out that as conflicts became more frequent, criticism of other sects was suppressed within the sect's core.

研究分野：日本史

キーワード：浄土真宗 日蓮宗 折伏 異安心 宗教秩序

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本近世の思想史研究は儒学、神道説や国学を対象としたものが多く、仏教思想に関する研究は少ない上に、一部の研究を除いては宗派ごとの教学史の枠組みに基づくものが主流であった。

一方、1990年代以降に盛んとなった宗教社会史研究や身分制研究(身分的周縁論等)においては、神社・寺院などの宗教施設、教団と宗教者(身分的社会集団)、民衆の信仰や意識形態に注目した研究が展開したが、思想史的な観点希薄であったために、仏教宗派における教学や神道説等が取り扱われることは稀であった。

したがって、研究開始当初まで仏教思想史研究が低調である状態は変わらず、また思想史研究と宗教社会史研究を関連づけた研究も僅少であった。そこで仏教及び神道を対象とする思想史研究と宗教社会史研究の隔たりを架橋することを試みることにした。

### 2. 研究の目的

「日本近世における仏教諸宗派間の関係、及び神道と仏教の関係が総体としてどのように存立していたのか、そしていかにそれが歴史的変容を遂げたのか」という問いを掲げ、近世宗教における対立・競合の側面に注目し、宗教者間の書物の上での論争にとどまらず、幕藩領主が関与した争論(訴訟)の事例も取り上げて、諸宗教・諸宗派間の関係の秩序がどのように変容していったのかを明らかにすることを目的とした。

また、諸宗教・諸宗派間の論争・争論を取り扱うに当たっては、対立・競合の現象の把握だけではなく、現象の基底にある社会構造の変化と俗人による宗教活動や信仰形態の変容過程をも探ることを目的にした。

### 3. 研究の方法

「日本近世における諸宗教・諸宗派間関係の秩序構造」を明らかにするために、仏教宗派・教団内における対立、仏教宗派間の対立、仏教・神道間の対立、という3つのレベルに即して検討を行うという方法をとった。具体的には3つのレベルに即して下記のような事例を検討することにした。

仏教宗派・教団内における対立

浄土真宗の教団内における教学論争や異安心事件

仏教宗派間の対立

浄土真宗寺院僧侶と日蓮宗寺院僧侶の論争、対立事件

仏教・神道間の対立事例

日蓮宗寺院僧侶と神職の争論

### 4. 研究成果

#### (1) 浄土真宗の教団内における教学論争や異安心事件に関する成果

西本願寺学林能化をつとめた功存の著作で三業帰命説の根拠となった『願生帰命弁』を批判した、粟津義圭の著作である『徹照西方義』や『閑論』を分析し、教学と布教者との間を媒介した義圭の所説の特徴を明らかにし、『日本近世史を見通す6 宗教・思想・文化』(吉川弘文館、2023年)の「学問流派の分立と教育・教化」で論述した。

さらに東本願寺教団における教学論争等を扱った芹口真結子『近世仏教の教説と教化』(2019年)の刊行を受けて、東本願寺学寮講師らによる異安心に対する教誡等の分析を試みた。その結果、真宗教団においては、18世紀後半に各地で生起した異安心事件や教学論争を裁定、調停していく過程で、学寮・学林といった僧侶の修学機関を拠点とした正統教学が成立していくという見通しを得ることができ、同書の書評で論じた。

また、19世紀前半に尾張国名古屋で成立した如来教や上述の芹口著書でも扱われた真宗の教学論争を取り扱った石原和『「ぞめき」の時空間と如来教』(2020年)の刊行を受けて、東本願寺学寮講師らによる異安心に対する教誡等の分析を試みた。その結果、異安心の疑いをかけられた尾張五僧に対する尋問者の間で教学理解に相違があることを明らかにし、同書の書評で論じた。

## (2) 日蓮宗僧侶が関わった論争と宗教者との争論

18世紀半ばごろ宝暦年間に岡山城下で起こった日蓮宗寺院10か寺と岡山藩神職との争論で、岡山藩池田家文書「社寺旧記」の関係記事と日蓮宗の本山史料である本能寺文書、「日蓮宗寺院返答書」(大和文華館蔵)などの史料を分析し、争論において日蓮宗寺院が同宗の教義にもとづいた原則的な行動をとり、時には岡山藩と対立していくなどの行動をとる背景に、同時期に行われていた不受不施派の取り締まりの問題があることが確認できた。

妙解院日透の『護法得宜論』と石見国安濃郡大田南村妙光寺日荘の著述である『末法要行録』両書の検討を通じて、日透と日荘との間の論争における構図を把握し、その上で日荘に見られる折伏主義的傾向が誘発したと考えられる、地域における紛争を分析した。その結果、妙光寺の近隣にある浄土真宗寺院である稲用村浄土寺の教恩との紛争と、大田南村神職石崎志摩との争論を取り扱った。これにより、法華経至上主義に立ち他宗派を批判する折伏を重視した教化が、地域内における宗派間の緊張や神職との争論を惹起したことを明らかにした。

また、大田南村神職の石崎志摩が記録した「石州大田南村神職石崎志摩・同所日蓮宗妙光寺隠居日荘出入公訴一件写」(津和野町堀家文書)を全文翻刻し史料紹介した。そしてこの史料を佛敎史学会2022年度大会における報告でも利用し、石崎志摩と日荘の争論全体の経緯を明らかにするとともに、神職石崎氏が本所吉田家を頼って訴訟を進めたこと、これに対し日荘は本山である本国寺の支援を十分には得られなかったと考えられること、争論を裁いた幕府役人が日蓮宗内諸派の動向をある程度把握しながら吟味を進めていたこと、他の紛争事例と異なり、日荘に厳しい処罰が下った背景を探る必要があること、などを指摘した。

さらに、日荘が依拠した本圀寺了義院日達の折伏主義的傾向を継承した彼の弟子筋にあたる僧侶らの活動事例を把握した。具体的には、明和3年(1766)に本圀寺から追院を命じられた大和国郡山妙善寺住職であった守要日康が、本山による処分に異議を申し立て幕府に訴え、明和5年(1768)5月に本圀寺学頭瑞雲院日応・奈良蓮長寺日誠らとともに寺社奉行土岐美濃守(定経)に召し出されて審議を受けたものの敗訴した事例から、日達が退いた後の本圀寺の方針変化(折伏の重視から摂受を基調とする態度へ)を読み取った。また、日康の事例に続き、安永4年(1775)大石寺に背き「四箇の名言」を唱えるなどの折伏修行を勧め態度を改めなかったということで遠島に処された摂津国島上郡梶原村源覚寺の堅樹日好の教えを引き継いで弘めている事例として、嘉永年間の無宿増十郎の一件などを見だし史料の解説を終えた。

## (3) 近世民衆の信仰実態に関する研究成果

松江城下の町人である新屋太助の日記(『大保恵日記』)を通読し、19世紀半ば頃の松江城下の寺院において盛んに行われていた浄土真宗の法談(説教)を太助が頻繁に聴聞していたこと、そして同人は真宗の教義についても理解していたが、観音菩薩や稲荷などに対する現世利益を求めた祈願は繰り返していたことなど、町人の信仰実態を明らかにした(小林准士『日本近世の宗教秩序』塙書房、2022年に論文を収録)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小林准士	4. 巻 130巻9号
2. 論文標題 書評 石原和著 『「ぞめき」の時空間と如来教：近世後期の救済論的転回』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 1526-1533
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林 准士	4. 巻 19
2. 論文標題 「石州大田南村神職石崎志摩・同所日蓮宗妙光寺隠居日莊出入公訴一件写」の翻刻	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会文化論集	6. 最初と最後の頁 t1～t17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24568/54764	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林准士	4. 巻 696
2. 論文標題 書評 芹口真結子著 『近世仏教の教説と教化』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 54-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林准士
2. 発表標題 近世日蓮宗における折伏主義と争論の展開
3. 学会等名 佛教史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小林准士ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 200
3. 書名 日本近世史を見通す 6 宗教・思想・文化	

1. 著者名 小林准士	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松江市	5. 総ページ数 69
3. 書名 松平治郷の治世－御立派改革後の松江藩政と藩領社会－	

1. 著者名 小林 准士	4. 発行年 2022年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 408
3. 書名 日本近世の宗教秩序	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------